

「ファミリー・アフェア」における渡辺昇論  
関 冰冰 楊 炳菁

Watanabe Noboru in “Family Affair”  
Guan Bingbing / Yang Bingjing

**Abstract**

The name “Watanabe Noboru” appeared many times as a character in Haruki Murakami's works. Among these instances, Murakami not only wrote the most about Watanabe Noboru in “Family Affair,” but also made Watanabe Noboru a foreign object. Watanabe Noboru had never entered Murakami's writing before, but, after getting used to describing Watanabe Noboru, Murakami aimed to add opposing evaluations in his works. Although Murakami indicates that the Watanabe Noboru in “Family Affair” is an important means to expand his novel, he does not specify how Watanabe Noboru plays such a role. Examining Watanabe Noboru from the opposing perspective “I” can reveal that Watanabe Noboru in “Family Affair” is a critical representative. He is, in fact, an antagonistic being, showing a different way of dealing with the world than “I”

**1 はじめに**

村上春樹の初期作品においては、「渡辺昇」<sup>1</sup>という名は極めて重要なものである。というのは、名前のない<sup>2</sup>大部分の登場人物と比べ、「渡辺昇」と命名された人物は何回も小説に出ており<sup>3</sup>、『鉛筆削り（あるいは幸運としての渡辺昇①）』と『タイム・マシーン（あるいは幸運としての渡辺昇②）』のように、掌編小説のタイトルの一部にもなっているからである。出版の順から言えば、「渡辺昇」という名は短編小説「象の消滅」で初めて現れており、飼育係としての渡辺昇は結局、象とともに消えてしまった。「象の消滅」をめぐる研究は象を中心に行われたためか、また主人公の「僕」との接触も少なかったこともあり、「象の消滅」における渡辺昇はさほど研究者の注意を引かなかったようである<sup>4</sup>。「渡辺昇」という名を有する人物に関

<sup>1</sup> 本稿における「」つきの「渡辺昇」は名前を表すもので、「」なしの渡辺昇は小説における登場人物のことを指している。

<sup>2</sup> ここでは本名を欠いていることを意味する。

<sup>3</sup> 登場人物として、「渡辺昇」は短編集『パン屋再襲撃』に頻繁に出てくる。ジェイ・ルービン氏が指摘したように、「この名前は『パン屋再襲撃』収録作品に次々と現れるが、そのキャラクターは統一されることなく、まったくバラバラである。「象の消滅」では、象の飼育係。「ファミリー・アフェア」では、未来の義弟。「双子と沈んだ大陸」（一九八五年十二月）では、「僕」の翻訳事務所の共同経営者。「ねじまき鳥と火曜日の女たち」（一九八六年一月）では、これと違って特徴のない義兄の名前といった具合だ。そして、更にこの作品においては重要なのは、この名前が義兄の名前をもらって名付けた猫の名前にもなっていることだろう。」（ジェイ・ルービン著、畔柳和代訳『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』新潮社 2006・9 P168）

<sup>4</sup> 筆者は「逸脱」の観点から「象の消滅」における渡辺昇を論じたことがあり、具体的な論述は拙稿「村上春樹文学

して、比較的注目されたのは「ファミリー・アフェア」に登場した渡辺昇である。彼はコンピューター・エンジニアで、「僕」の妹の婚約者でもある。「ファミリー・アフェア」における彼は「僕」と二回も会ったことがあり、彼をめぐる、「僕」と妹との間に葛藤が生じた。したがって、「ファミリー・アフェア」を解説する際、渡辺昇はどうしても避けられない人物になっている。

ところで、「ファミリー・アフェア」に登場した渡辺昇について、村上春樹は次のように解説したことがある。

渡辺昇という名前が力を持った例ですね（中略）「ファミリー・アフェア」における渡辺昇はありありとした現実の存在だし、まあ異物ですね。名前を与えられたことによって異物としての機能を身につけたんです。彼の登場によって「僕」という主人公が微妙に揺らぐんですね。その辺が僕自身書いていてわりに新鮮だったような気がするんです。

（中略）

そういう異物を含んだ状況というのは書いてみたいと思うし、だんだん書けるようになってくるんじゃないかな。これまでは僕の描きたいというものの視野にそういうものがあまり入ってこなかったということなんですけどね。そういうものが入ってこないところで自分の独自の小説世界みたいなものを作っていくたかった。でも正直言ってそろそろそれだけでは足りない気がしてきているしね。もっといろんなものを対立させてみたいとは思います。僕自身刺激がほしいですね。<sup>5</sup>

村上春樹の解説から「ファミリー・アフェア」における渡辺昇の重要性が窺われる。具体的に言えば、まず、彼は同じ登場人物の「僕」にとっては「異物」であり、影響力を有する者でもある。したがって、彼の登場が「僕」を揺るがしている。そして渡辺昇の登場はある種の対立をもたらし、村上春樹の創作空間はこのような対立によって拡大されている。最後に、これほど重要な役割を果たせる原因は「渡辺昇」という名に由来し、言い換えれば、「渡辺昇」は特別な名前であるがゆえに、「ファミリー・アフェア」に登場した渡辺昇は、以上のような重要な役割を果たすことができるのだ。

村上春樹は「渡辺昇」という名の特別さを強調したが、名前の観点から言えば、「渡辺昇」はごく普通の名前に過ぎないだろう。「渡辺昇」と呼ばれたため、キャラクターの存在感が増して、作品に根本的な変化を起こすわけでもないし、その名自体にも何の特別な意義は含まれていないはずだ。つまり、「渡辺昇」という名は決して小説を解説するキーワードにはならず、「渡辺昇」を他の名に変えても、さほど支障がないと思われる。したがって、もし「渡辺昇」という名が何か特別な性質を帯びているなら、それは村上春樹が付与したもので、村上春樹の小説にのみ現れるだけでなく、一つの記号にもなったと言えるのではないか。勿論、別のいずれかの名ではなく、「渡辺昇」が記号として扱われるのには、それなりの理由があると思われるが、なぜ「渡辺昇」を記号にしたかということを検証するより、「渡辺昇」と呼ばれる登場人物がどんな性質を有するかを検証するのが、肝心なところだろう。というのは、「渡辺昇」の帯びた特別さが、

---

における「逸脱」－「象の消滅」における渡辺昇を中心に－（『村上春樹文学における「逸脱」』淡江大学出版中心 2022・7 P185-206）に詳しい。

<sup>5</sup> 村上春樹、柴田元幸「山羊さん郵便みたいに迷路化した世界の中で」（『ユリイカ 臨時増刊』 1989・8）P14-15

もしその名自体によってもたらされたものであるなら、「渡辺昇」と呼ばれる人物の性質と深く関わっているからである。

「渡辺昇」を一つの記号として見てみれば、村上春樹の小説で「渡辺昇」と呼ばれる人はおそらく何か同様な性質を持っていると推測される。だが、先行研究を調べてみると、「渡辺昇」という名が頻繁に登場するという現象はよく指摘されるものの、記号としての「渡辺昇」をめぐる進んだ研究は、管見の限り現れていないようである。例えば、ジェイ・ルービン氏は「渡辺昇」について言及したが、その議論は以下のようになっている。

短編集に収められたこれらの作品を執筆した当時、村上は友人のイラストレーター安西水丸の本名を使って楽しんでいたに過ぎない。(中略)「ワタナベ」は日本によくある姓で、多分村上はその平凡さゆえに使ったのだろう。のちに『ノルウェイの森』の主人公にもこの姓が与えられるが、名は「トオル」となる。<sup>6</sup>

「渡辺昇」は安西水丸の本名であると、村上春樹自身も言及しているが<sup>7</sup>、ジェイ・ルービン氏はそれを『ノルウェイの森』と関連づけて、苗字の平凡さゆえに使われたものと推測した。だが、平凡であるがゆえに使われたという理由づけは、いささか強引なところがあると思われる。小説は平凡な人の平凡なことを書くという観点から考えれば、あらゆる登場人物は「渡辺昇」と命名されても良い。確かに「渡辺」は平凡な苗字だが、日本人の苗字には平凡なものがあまりにも多く、安西水丸の本名を使用するのは、ただその偶然性を語るのみだ。また、「渡辺」の平凡さは、いかなる人物を「渡辺昇」と命名するかということとは関係がないようである。なぜなら、村上春樹の小説における「渡辺昇」は「平凡」な人物ではなく、特定の性質を帯びた一部の人を表しているからである。

いかなる人が「渡辺昇」と名付けられるかということに関する検討は、極めて重要な作業だと思われる。村上春樹の解説からわかるように、これは「渡辺昇」がもたらした対立の性質を究明することができるだけでなく、その対立がいかに小説の空間を拡大させるかについても、知らせてくれる。「渡辺昇」と呼ばれる人の性質を究明する一環として、本稿は「ファミリー・アフェア」における渡辺昇を対象にして分析を試みる。対象の選択の理由は、前記の村上春樹の解説によるところが大きい。つまり、「そういう異物を含んだ状況というのは書いてみたいと思うし、だんだん書けるようになってくるんじゃないかな」という発言から、村上春樹が、「ファミリー・アフェア」における渡辺昇は、それなりの役割を果たしたことを認めているのだ。

---

<sup>6</sup> ジェイ・ルービン著、畔柳和代訳『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』（新潮社 2006・9）P168-169

<sup>7</sup> 村上春樹「村上春樹大インタビュー「ノルウェイの森」の秘密」（『文藝春秋』 1989・4）P172-173

## 2 対立の性質

村上春樹の解説によれば、「ファミリー・アフェア」においては、「僕」と渡辺昇との対立が存在し、それによって小説の空間を拡大させたわけである。それでは「僕」と渡辺昇との間に生じた対立はいかなるものだろうか。

酒井英行氏は著書『村上春樹 分身との戯れ』において、本作の題名について、次のように分析した。

妹の婚約者に対する「僕」の否定的感情、および、結婚相手としてそういう男を選択した妹に対する「僕」の疑念、失望感を吐露することから、『ファミリー・アフェア』は語り始められている。自分の外部の人間に向けて、そのような否定的な感情を表出する「僕」に対する妹の反発、妹は、「僕」に対して、「苛立っている」ように見えるのだ。親元を離れて、「二人で暮らす」「僕」と妹という<ファミリー>（兄妹）の（主として、妹の側から仕掛ける）仲たがいこそが、作品の題名でもある<ファミリー・アフェア>だと言えよう。<sup>8</sup>

題目についての分析であるが、本作について、「僕」と妹の葛藤、つまり妹の婚約者に否定的な態度を持つ「僕」と、それに反発する妹との出来事を描いている、と酒井氏は見ているようである。内容に関する要約としては、いかにも妥当のように見えるが、実は極めて肝心のポイントが見落とされているのではないだろうか。確かに渡辺昇に対して「僕」は否定的な態度を抱いているが、その否定的な態度は一体何に由来したのだろうか。「僕」の否定的な態度の原因について、二つのことが考えられる。一つ目は妹の婚約者であるという渡辺昇の立場に対する拒否感、もう一つは渡辺昇その人自身の性質への拒否感である。二つのうち、どちらが「僕」の否定的な態度を招いたかについての判断は重要だろう。なぜなら、もし、妹の婚約者であるがゆえに、言い換えれば、婚約者という立場のせいで「僕」の否定的な態度を招いたとしたら、渡辺昇と「僕」の対立はむしろ「僕」と妹との対立と言ったほうがふさわしいからである。つまり、「僕」の否定的な態度の原因は、渡辺昇との関係にはなく、その人の人格自体にあるからこそ、渡辺昇は「僕」を揺るがすことになるのである。

だが、研究の重点が「僕」の置かれたためか、または以上の二つの原因には、さほど大きな区別がないと考えられたためか、「ファミリー・アフェア」をめぐる先行研究は、渡辺昇に対する「僕」の否定的な態度の原因を区別していないようである。例えばジェイ・ルービン氏は次のように分析したことがある。

「ファミリー・アフェア」の語り手も、電機メーカーの広報に勤めるタイプである。（中略）彼は一人の大切な人物を失うことを怖れている。それは、自分の妹だ。彼女は、渡辺昇というやぼったいコンピューター・エンジニアと結婚しようとしている。<sup>9</sup>

<sup>8</sup> 酒井英行『村上春樹分身との戯れ』（翰林書房 2001・4）P217

<sup>9</sup> ジェイ・ルービン著、畔柳和代訳『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』（新潮社 2006・9）P168

以上の分析は、曖昧さを帯びていることは否めない。というのは、氏の分析から「僕」の否定的な態度は、渡辺昇が大切な妹を奪ったためか、それとも「やぼったい」彼がとても妹の婚約者にふさわしくないためかについて、明確に把握できないからである。実際にはこの両者には根本的な違いが存在しているのではないだろうか。つまり、もし前者の場合だったら、否定的な態度の原因は「僕」のところにあり、渡辺昇はどんな人なのかはさほど重要なものではなく、妹の婚約者という彼の立場こそ重点であると言える。一方、もし後者の場合であるなら、否定的な態度の原因は渡辺昇自身にあり、彼に関する検討には意義が生ずるわけである。

実は小説の内容から見ても、先行研究の結果から見ても、渡辺昇は妹の婚約者であるゆえに、「僕」の否定的な態度を招いたという印象を与える。

そういうのは世の中にはよくある例なのかもしれないけど、僕は妹の婚約者がそもそもの最初からあまり好きになれなかった。そして日がたつにつれ、そんな男と結婚する決心をするに至った妹そのものに対しては少なからず疑問を抱くようにさえなっていた。(P69)<sup>10</sup>

以上は小説の冒頭で、語り手を兼ねる「僕」と自分の妹との間に対立が生まれたことが読み取れる。まずこれは「よくある例」なので、妹の婚約者に対する否定的な態度は特別なものではなく、むしろ兄としての一般的な態度と言って良いだろう。兄妹関係が良好状況においては、妹の婚約者が往々にして自分の妹を奪う「敵」だと見なされているからである。そして、婚約者という立場によって妹を奪うことになるので、「妹の婚約者がそもそもの最初からあまり好きになれなかった」という結果になったわけである。「そもそも」という表現から見れば、「僕」の否定的な態度は決して渡辺昇のことをよく知った上で表したのではなく、むしろ妹をめぐる婚約者との対立によって生じたものと言える。したがって、渡辺昇が一体どんな人物なのかは、特に重要なことではなく、肝心なのは彼が妹の婚約者であるということにある。

小説の描写だけでなく、先行研究も同様の傾向を示している。例えば前述の酒井英行氏は妹のことを「僕」の分身と見なしており、両者の関係について以下のように分析した。

「二人で暮らす」兄と妹という関係性の設定は、夫婦間のこの他者性を取り除くための村上春樹の仕掛けだと見るべきであろう。「年をとった」夫婦の関係性から、その他者性を抜き取った関係様態、「僕」と妹は、そのように精神的に融合した一つの自我、濃密な分身関係にあるのだ。<sup>11</sup>

酒井氏はここで明らかに「僕」と妹の関係を「年をとった」夫婦の分身関係と見なしている。もしそうであるなら、妹の婚約者である限り、誰でも「僕」と妹の関係を壊すことができ、言い換えれば、渡辺昇に限らず、誰でも「僕」の否定的な態度を招くことになるだろう。だが、「僕」と妹の関係は果たして本当に酒井氏が分析したようなものなのだろうか。

<sup>10</sup> 本稿は『村上春樹全作品 1979～1989⑧短編集』（講談社 1991・7）に収録されたバージョンをテキストとし、小説からの引用はページ数だけを示す。

<sup>11</sup> 酒井英行『村上春樹分身との戯れ』（翰林書房 2001・4）P218

前にも言ったように僕と妹は仲が良かったし、二人で暮らすことに僕は殆ど苦痛を感じなかった。僕は電気メーカーの広告部に勤めたせいで、比較的朝は遅く出勤し、夜は遅く帰ってきた。妹は朝早く大学に出かけ、だいたい夕方には帰ってきた。だから僕が目覚めたときには彼女はもういないし、帰ってきたときにはもう眠っていることが多かった。おまけに殆ど土曜と日曜日を僕は女の子とのデートに費やしたので、彼女とまともに口をきくのは週に一回か二回という有様だった。しかし結局はそれが良かったのだと思う。我々はそのおかげで喧嘩一つする暇もなかったしお互いのプライバシーには口を挟まなかった。

彼女にもたぶんいろいろなことがあったのだろうと思うけれど、僕はそれには一切口を出さなかった。十八を越えた女の子が誰と寝ようが、そんなのは僕の知ったことではないのだ。(P76-77)

これは「僕」と妹が東京でともに暮らす五年間の暮らしぶりを描いた部分である。仕事の関係で、同じアパートで生活していても、平日に妹と対面することはほとんどないことが分かる。対面が少ないため、勿論交流するチャンスも少なくなったが、対面できる休日の土曜と日曜になると、「僕」はそれを女の子とのデートに費やしたのである。「僕」の女の子とのデートについて、酒井氏は次のように評したことがある。

「僕」のなかでは、「女の子」の存在価値はその性的身体のみ還元されているのだ。セクシュアリティの客体としての、モノ化された女性の性的身体……。 「女の子」たちは、関係性を築くべき、名前（人格）を持った他者として立ち現れてはいないのだ。<sup>12</sup>

「僕」にとって、彼女を含めた「女の子」たちはただ「モノ化された」身体に違いない。もし酒井氏の分析に従えば、妹は「僕」にとってさほど大切な存在ではないことが分かる。なぜなら、もし妹のことを重要視すれば、例え平日に対面することがなくても、「僕」は休みの土、日曜を利用して彼女と交流するはずである。だが、「僕」はその休みの日を「モノ化され」た「女の子」とのデートに費やしたいと思っている。これは、妹が「モノ化され」た「女の子」ほど重要ではないことを語っているだろう。

以上の分析から分かるように、「僕」と妹は確かに一緒に暮らしているが、決して互いに理解しあって、心が通じ合うような共同体ではない。二人はそれぞれ自分のペースで生活しており、互いに深く交流することも皆無と言っていいほどである。これは一見交流のチャンスが少ないためにもたらされた結果のようだが、兄にとっては妹に対する責任の放棄、あるいは逃避と言って良いだろう。そうだとすれば、妹に無関心な「僕」は当然彼女の結婚に関心を寄せず、「僕」と妹、換言すれば「僕」と妹の婚約者との対立も存在しなくなる。であれば、いわゆる「僕」と渡辺昇の対立は、間違いなく「僕」と渡辺昇の人間性との対立に違いないのだ。

---

<sup>12</sup> 酒井英行『村上春樹 分身との戯れ』（翰林書房 2001・4）P221

### 3 対立の原因

対立の性質を分析した結果として、妹に無関心な「僕」のことが浮き彫りとなった。一般的に言えば、そのような「僕」はとても妹の婚約者に興味を持たないだろうし、対立も生じないはずだ。だが、「僕」は渡辺昇に否定的な態度を抱いたし、対立も生じた。「僕」と渡辺昇との間に、なぜ対立ができたのだろうか。

「ファミリー・アフェア」の冒頭において、スパゲッティ・ハウスでの「僕」と妹との喧嘩が描かれている。「僕」はこの喧嘩を「代理戦争」と定義し、その原因は「何もスパゲティーだけを問題にしていたわけではない。スパゲティーの少し先の方には彼女の婚約者がいて、彼女はどちらかといえばそちらの方を問題にしていた」(P69)からである。喧嘩の内容はともかくとして、「喧嘩一つする暇もなかった」「僕」と妹が喧嘩するようになったことは大きな変化と言えよう。確かにそれ以前、「僕」と妹は「いろんなことを正直に語りあえる」(P73)し、「喧嘩だって殆どしたことがなかった」(P73)が、果たしてそれは「仲の良い兄妹」の証拠になるのだろうか。

前述したように、「僕」と妹は滅多に交流しない。滅多に交流しないから、当然喧嘩する暇もない。一方、「僕」は「我々はいろんなことを正直に語りあえる仲の良い兄妹」と認め、これは対面のチャンスが少なく、滅多に交流しない二人の関係と矛盾していると言わざるを得ない。だが、本作を読めば分かるように、「僕」と妹は確かに「いろんなことを正直に語りあえる」が、その「正直に語りあえる」内容は以下のものとなっている。

彼女は僕のマスターベーションのことを知っているし、僕は彼女の初潮のことを知っている。彼女は僕がはじめてコンドームを買ったときのことを知っている（僕は十七歳だった）、僕は彼女がはじめてレースの下着を買ったときのことを知っている（彼女は十九歳だった）。

僕は彼女の友だちとデートしたことがあるし（もちろん寝なかった）、彼女は僕の友だちとデートしたことがある（もちろん寝ていないと思う）。(P73)

マスターベーション、レースの下着など、このような内密のことを相手に教えるのは確かに親しい関係性を示しているが、心が通じ合うような交流とは次元が異なっていると指摘したい。そして、以上のようなことは二人の東京暮らしが始まる前のことが多く、それ以降、果たして「いろんなことを正直に語りあえる」チャンスがあったかどうか分からない。要するに、妹との交流を避ける「僕」は終始変化しておらず、もし二人の喧嘩を一つの指標として考察すれば、変わったのは妹だと言える。

妹の変化を分析する前に、それまでの妹はどのような状態だったのかについて、見てみたい。小説では、「僕」が妹を慰める場面を描いている。二時間も泣いた妹は結局「僕」の一言で泣くのをやめたが、その過程を詳しく考察すると、今まで妹は「僕」と同じ生活態度をとっていたことが分かる。

そのときの「僕」を見てみれば分かるように、深夜に帰宅した彼は、まず台所で泣いている妹が慰めを求めのをただちに意識し、「彼女の手を握ってやっていた」(P77)のである。しかし、妹は「そのままの姿勢で何も言わずに二時間泣いていた」(P77)ので、疲れてきた「僕」は「何か言わなければならない」(P77)と思って、妹の立腹を招くことになる「忠告」を語った。「何か言わなければならない」と思った

ものの、それほど本気ではなく、妹を慰めるよりも、早く「自分のベッドにもぐりこ」(P78) みたがって  
いたからに違いない。一方、慰めることが苦手な「僕」はまず「お前の生活に一切干渉したくない」(P77)  
「お前の人生なんだから好きに生きればいい」(P77) とも言う。これは妹に最大限の自由を与えようとい  
うように聞こえるが、実は人生のような重みのある話題について意見したくない、あるいは意見できない  
「僕」の姿勢を示しているだろう。そして、まさにそのような姿勢だったために、「僕」が続けて言ったの  
は「バッグの中にコンドームを入れるのだけはよした方がいいよ。売春婦と間違えられるから」(P77) と  
いう「忠告」になるのだ。勿論「僕」は妹の「バッグの中なんて一度ものぞいたことはない」(P78) ので、  
その「忠告」は明らかに冗談に過ぎず、話の焦点をずらす手段と言って良いだろう。

「僕」の「忠告」は妹の涙を止めたが、彼女はおそらく本当には慰めを得られていなかったはずだ。実  
際には、「僕」が「お前の生活」「お前の人生」などと言いつつ、妹は肯いて「僕」の続きを待って  
いたようだが、「忠告」を聞くや否や、「テーブルの上の電話帳を手にとって、僕に思いきり投げつけた」  
(P78)。妹の行動について、酒井氏は「妹は意識的に「僕」を支配しようとしているわけではなく、彼女自  
身の弱さ、論理的には他者に対応できない弱さが暴力的行為に走らせている」<sup>13</sup>と分析したが、妹は果たし  
てそういうタイプの人間だろうか。

「本当の生活というのは人と人がもっと正直にぶつかりあうものよ。そりゃたしかにあなたとの五  
年間の生活はなりに楽しかったわ。自由で、気楽でね。でも最近になって、こういうのは本当の生活  
じゃないと思うようになったの。なんていうか、生活の実体というものが感じられないのね。あなた  
はまるで自分のことしか考えてないし、真面目な話をしようとしても茶化すばかりだし」(P96)

この引用は渡辺昇を家に招待するときの妹の語りで、論理的に他者に対応できない人間の言葉ではない。  
したがって、彼女が「僕」に暴力を振った原因は、本当の慰めを得られず、くだらない冗談を言われた  
からだ。勿論、妹はそのときそれを意識したかどうかわからないが、少なくとも以下の二点からこの推測  
が成り立つと思われる。まず、「お前の生活」「お前の人生」などと言われたとき、彼女は電話帳を投げつ  
けなかった。つまり、妹の暴力は自分の弱点によるものではなく、「僕」のふざけた言葉が根本的な原因と  
言える。そして、「最近になって、こういうのは本当の生活じゃないと思うようになった」彼女は、当時お  
そらく本当の慰めを与えられなかったと知っていながら、「自由」で「気楽」な生活を選んだと考えられる。  
というのも、彼女の「五年間の生活はそれなりに楽しかった」からである。要するに渡辺昇との交際が始  
まる前までは、妹は「僕」に同調して暮らしてきたわけである。

今まで「正直にぶつかりあう」ことではなく、「僕」に似た生活態度をとってきた妹は、「最近になって、  
こういうのは本当の生活じゃないと思うようになった」。これは明らかに妹の変化を表しているが、その変  
化は当然ながら、渡辺昇との交際と深く関わっている。妹の変化は主に二つの面において現れてくる。ま  
ず、服と生活様式の変化。妹は「きちんと家事をするようにもなったし、服にも神経を使うようになった」  
(P78)。おそらく恋愛中の女性には、誰にでも以上のような変化が起こるが、これに対する「僕」の評価

<sup>13</sup> 酒井英行『村上春樹分身との戯れ』(翰林書房 2001・4) P227



は興味深い。「そういうのは危険な徴候だった。女の子がそういう徴候を見せはじめたら、男は一目散に逃げるかあるいは結婚するしかない。」(P79)これが正しいかどうかはともかくとして、感情が入らず、完全な傍観者の姿勢で冷静に自分の妹を評した「僕」に注目したい。これは「お互いのプライバシーには口をはさまなかった」両者の関係と一致し、妹に婚約者がいるかどうかという問題が、「僕」に特別な影響を及ぼしていないことも示していると思われる。

だが、妹の二番目の変化は「僕」を冷静にさせず、「腹立たしい気分」(P73)にさせた。

ほんの一年ばかり前まで彼女は僕の僕なりに確固としたいい加減な生き方を一緒になって楽しんでいたし、僕に——僕を感じ方さえ間違っていなければ——ある意味では憧れてもいたのだ。彼女が僕を少しずつ非難するようになったのは、その婚約者とつきあいだしてからだった。(P72)

妹と「友好的な関係がたった一年のあいだにがらりと変質してしまう」(P73)ので、「僕」は当然「腹立たしい気分になってきた」が、その変質を招いた原因は興味深い。つまり、妹は「僕」の生き方を批判し始め、それによって、二人の関係が変質してしまったわけである。前述したように、妹は「僕」の生活ぶりを本当の生活ではないと批判したことがあり、「代理戦争」のときも、「一年ごとに寝る相手をとりにかえて、それで楽しいの？ 理解とか愛情とか思いやりとかそういうものがなければ、そんなの何の意味もないじゃない」(P72)と言いだした。その喧嘩自体はすでに変化を見せており、当時の話から妹が理解した「本当の生活」は、理解と愛情に満ちたもので、決して気楽に済ませられるものではなかったことが分かる。妹の非難、喧嘩は決して感情的なものではなく、「正直にぶつかりあう」ことで、「僕」と深く交流する試みと言って良い。だが、正直に話し合うのはまさに「僕」が避けたいもので、「確固としたいい加減な生き方」を保つ手段とも言える。したがって、妹の二番目の変化は「僕」に大きな影響を及ぼし、渡辺昇との交際が始まってからのもので、本作では「僕」と渡辺昇との対立が再度確認できる。

要するに「僕」と妹は明らかに、互いの関係を変化させた。表面的には、二人は喧嘩するようになったのだが、その背後に妹の生活態度の変化が存在し、言い換えれば、彼女は「いい加減な生き方」から「ぶつかりあう生き方」に変わったわけである。これは渡辺昇との交際によってもたらされた結果で、渡辺昇は「ぶつかりあう生き方」の提唱者に違いない。「ぶつかりあう生き方」は「僕」の避けたいもので、「僕」と渡辺昇との対立の根本的な原因はここにある。

#### 4 対立の変化

以上の分析から分かるとおり、「僕」と渡辺昇との対立は妹の変化によるもので、具体的にいえば、渡辺昇と付き合い始めた彼女は「いい加減な生き方」から「ぶつかりあう生き方」に変わり、それはまさに渡辺昇に影響された結果だと「僕」は思ったわけである。そもそも「いい加減な生き方」と「ぶつかりあう生き方」は正反対とも言える人生への態度で、「僕」が妹と喧嘩するのも特に不思議はないだろう。だが、もし「僕」が本当に「いい加減な生き方」を徹底的に貫いたら、たとえ妹が「ぶつかりあう生き方」に变

えても、彼女と喧嘩せず、むしろどうでもいような態度を取り、放任させるだろう。したがって、「僕」の「いい加減な生き方」を検討する必要がある、妹との喧嘩もさらに考察すべきだと思われる。

実は「僕」の「いい加減な生き方」の前に「確固とした」という修飾がつけられており、「確固としたいい加減な生き方」は、「僕」が自分の生活状態を規定する定義のようなものと言っていいだろう。この「確固としたいい加減な生き方」に対し、加藤典洋氏は以下のように分析した。

ふつうは「いい加減な生き方」というのは「いい加減な」態度決定の結果、手にされるものですが、彼においては、それは「確固とした」態度決定のすえに獲得されているからです。<sup>14</sup>

「僕」はなぜ「いい加減な生き方」をとるかについて、加藤氏は言及していないが、氏の分析によれば、以下の三点が明らかになっている。まず人生に対する「僕」の「いい加減」は「人間的成熟とはほど遠い、幼児的な自己中心性」<sup>15</sup>によるものではなく、むしろ熟慮した上での「僕」の選択と言って良い。というのは、「確固とした」という修飾があることから分かるように、「僕」はただ表面的にそういう態度をとっただけなのである。この場合、たとえその生活態度が批判されても「僕」はそのスタイルを固持することになる。つまり、「いい加減な生き方」は「僕」が意図的に選んだもので、別の生き方に切り替えられる「僕」という存在が推測できる。次に、もし渡辺昇と交際する前に、妹が「僕」と同様な生活態度をとっていたと言えるなら、それはただ「いい加減な生き方」<sup>16</sup>と呼ばれるもので、「確固としたいい加減な生き方」とは言いづらい。つまり、渡辺昇との交際で簡単に変わってしまった妹の「いい加減な生き方」は、「僕」の「確固としたいい加減な生き方」とは次元が異なる。最後に、「確固としたいい加減な生き方」は「僕」が熟慮した上での選択であるからこそ、簡単に変えられないものだ。だから「僕」は、妹と喧嘩するようになっただけでなく、婚約者の渡辺昇に対しても否定的な態度を取ったわけである。言い換えれば、もし「確固としたいい加減な生き方」が「僕」の熟慮した上での選択でなければ、妹が誰と付き合っても「僕」にとって差し支えないことで、たとえ妹に非難されても、相手にしないはずだ。

以上の考察から分かるように、渡辺昇に対する「僕」の否定的な態度は決して感情的なものではない。それは生活態度に関わるものであったため、その否定は根元からの否定となり、両者の対立も人生観の対立となる。だが面白いことに、小説の最後において、否定的な態度をとった「僕」は渡辺昇に対して自分の態度を変え、「まあ悪い男じゃない。僕の好みじゃないし、服装の趣味もちょっと変わってるけど」と「正直に言った」(P104)。冗談を言い続ける「僕」は、「正直に」自分の態度を表し、そこから渡辺昇に対する「僕」の気持ちの変化が窺われる。否定的な態度をとる「僕」はなぜ自分の態度を変えたのか、そのきっかけは何なのだろうか。

この問題を分析する前に、渡辺昇に対する「僕」の評価をもう一箇所、考察したい。渡辺昇の家を訪問した後、「僕」は母親に電話し、渡辺昇のことを「そんなに悪くない男だよ」(P84)と評した。小説の最後に出たものと比べ、母親への報告は同様に渡辺昇に会った後で、使われた文句も似ている。ただ、二回目

<sup>14</sup> 加藤典洋『村上春樹の短編を英語で読む 1979～2011』(講談社 2011・8) P308

<sup>15</sup> 酒井英行『村上春樹 分身との戯れ』(翰林書房 2001・4) P224

<sup>16</sup> 妹の言葉で表現すれば、「自由で、気楽」なものである。

の評価は、「僕」が「正直に言った」もので、それに対して、母親に電話する一回目の評価は、「僕」が耳たぶをかきながら言ったものなのだ。耳たぶをかくことは、人間の無意識的な動作として、一般的にはすぐには解決できない困難やトラブル、複雑な何かを抱えたときにやるものではないだろうか。おそらく「僕」は、どのように妹の婚約者を評価すればよいかに困り、耳たぶをかくことでそういう状態を別の意識に向けて解決しようとしていたのだろう。もし本当にそうであるなら、母親に言った「そんなに悪くない男だよ」という評価は、「正直に言った」と言えるほどのものではなく、適当に自分の責任を果たしただけだった。

以上、渡辺昇に対する「僕」の評価を考察したが、さらに言えば、「ファミリー・アフェア」において、渡辺昇をめぐる「僕」の意見を集中的に描写する部分が三箇所ある。一箇所は妹が渡辺昇の写真を「僕」に見せ、「僕」に意見を求めた時だったが、写真を見た「僕」は相変わらず冗談を言い、話の焦点をずらした。しかし、地の文では「僕」は自分の考えを次のようにはっきり表している。

顔立ちは悪くないが、頭がからっぽで、押しつけがましい男だった。おまけに象みたいに記憶力が良くて、つまらないことをいつまでもいつまでも覚えている。頭が悪いぶんを記憶力で補っているのだ。  
(P79)

そして「皮のつなぎを着て大型のバイクにもたれていた」(P79) 渡辺昇の二枚目の写真について、「僕」は「何も言わないことにした」(P80) が、「だいたいにおいてバイク・マニアが好きになれない。格好があげすぎるし、能書きが多すぎる」(P80) と思った。地の文に出た「僕」の考えは口にした評価と異なり、自分の本当の気持ちを表すものだろう。したがって、これらは渡辺昇に対する「僕」の写真を介した印象に過ぎないが、とても良いものとは言えず、むしろ極めてマイナスのものと言っていいだろう。

渡辺昇をめぐる「僕」の二つ目の意見は、渡辺昇の家を訪問し、渡辺昇本人に面した「僕」に依拠している。

そのあいだ息子であるコンピューター技師は何も言わずに緊張した面持ちで父親のそばにじっと座っていた。彼が少なくともこの家の屋根の下では父親の権力の支配下にあることは一目でわかった。まったくねえ、と僕は思った。彼はそれまで僕が見たこともないような奇妙な柄のセーターを着て、その下に色のあわないシャツを着ていた。いったいなんだったもう少しまともな気のきいた男を見つけてこなかったんだ？ (P82-83)

加藤典洋氏はこの「僕」の態度を分析し、渡辺昇について「鈍感で、既存の秩序に従順で、おまけに服装の趣味も悪い、「世間」を代表する」<sup>17</sup>存在と解釈した。渡辺昇は世間の代表であるかどうかについては後に述べるが、「父親の権力の支配下」「奇妙な柄」「気が利かない」などという表現から、この時の「僕」の観察は依然としてマイナスのものに違いない。だから母親に電話した時、渡辺昇が「そんなに悪くない

---

<sup>17</sup> 加藤典洋『村上春樹の短編を英語で読む 1979～2011』(講談社 2011・8) P318

男だよ」と「僕」は言うが、その評価は本音ではない。勿論、「悪い男じゃない」、「悪くないだろう」——渡辺の存在は、否定的に肯定されているに過ぎない<sup>18</sup>と見ている研究者もいるが、「悪い男じゃない」と「悪くないだろう」は異なった時期における「僕」の評価であることを強調したい。つまり渡辺昇という男を知り、彼の写真を見せられてから、妹とともに渡辺昇の家を訪問する時期まで、「僕」は終始、渡辺昇に否定的な態度を持っており、その評価も一貫してマイナスのものである。したがって、母親に言った「そんなに悪くない男だよ」は適当なごまかしに過ぎず、その背後には妹の結婚に特に関心を持たず、他人のことに一切干渉しない「僕」の姿が読み取れる。

だが前述したように、二回目の渡辺昇との対面の後、「僕」は「正直に」「悪くないだろう」と渡辺昇を評価し、そして「一族に一人くらいはああいうのがいても悪くないだろう」(104)と言う。これは明らかに彼のことを妹の婚約者として認め、否定的な態度を肯定的に変えている。すでに分析したように、渡辺昇の家を訪問するときも、「僕」はまだ悪い印象を持ち、渡辺昇のことを嫌っている。したがって、もし、渡辺昇を認め、否定的な態度を改めたとすれば、それは間違いなく渡辺昇を招待する二回目の対面の時に起きた変化と言っていいだろう。果たしてその時、渡辺昇と「僕」との間に何が起こっていたのか。

一見すると、渡辺昇を招待したときの二回目の対面は、特別な出来事が何も起きていないように思われる。「僕」は依然として冗談を言い続け、渡辺昇が自分の仕事を紹介するときも、それが「フィンランド語の動詞の変化と同じくらいよく分からなかった」と思ったし、「彼が熱心に話しているあいだ」、「適当に肯きながらずっと女の子を考えていた」(P94)。以上の描写は「僕」と渡辺昇との違いが再度、強調されているだけでなく、渡辺昇に対する「僕」の否定的な態度も変わっていないことが読み取れる。

二回目の対面の時に起きたステレオ「修理事件」を、加藤典洋氏は次のように読んだ。

渡辺昇は、余暇でも会社内のプロジェクトでも、故障、事故が起こったときにそれを「修復」する、そのような人間として現れる。書き手が渡辺昇の他者性の設定において、彼を修復者とすることに意識的であるらしいことがわかります。<sup>19</sup>

「僕」が「次から次へと」<sup>20</sup>故障に襲われたと見なす加藤氏の解釈は、一定の説得力を示している。妹との喧嘩後、家に帰って音楽を聞こうとしたが、ステレオ・セットの故障で何も聞けなかったことは、「僕」が遭遇した一連の「故障」の一つとして、さらには、それを直した渡辺昇は「修復者」として、見なされる。だが、たとえ渡辺昇が「修復者」としての価値を見せても、「僕」にとってそれはいかなる意義を持つのか。言い換えれば、渡辺昇の出現だけでは、彼と「僕」の関係はもちろんのこと、「僕」と妹の関係も修復されていないように見える。「僕」が渡辺昇を認めたのは、彼が「修復者」としての価値があるからではないだろう。

「悪い男じゃない」「悪くないだろう」という渡辺昇に対する似たような評価が繰り返し提示されているだけでなく、「良い面だけを見て、良いことだけを考えるようにすれば、何も怖くないよ。悪いことが起き

<sup>18</sup> 酒井英行『村上春樹分身との戯れ』(翰林書房 2001・4) P236

<sup>19</sup> 加藤典洋『村上春樹の短編を英語で読む 1979～2011』(講談社 2011・8) P317

<sup>20</sup> 加藤典洋『村上春樹の短編を英語で読む 1979～2011』(講談社 2011・8) P314-315

たら、その時点でまた考えればいい」(P97)という「僕」の発言は二回も現れる。一回目は渡辺昇が「僕」に「僕も本当はあなたと同じように三十近くまでは一人でいたかったです」(P97)、「でも彼女に会って、どうしても結婚したくなかったです」(P97)、「でも、結婚するのってなんだか怖いですね」(P97)と打ち明けた後の「僕」の答えで、もう一回は妹が「ときどき、なんだかすごく怖いよ、先のことが」(P102)と言った後の「僕」の回答だった。いうまでもなく、これは渡辺昇と妹が自分の不安を吐露した場面である。「僕」は相変わらずクールに応じたが、小説の結びに至って、彼は自分の本当の心境を次のように披露した。

ベッドのシーツは新しく清潔で、しわひとつなかった。僕はその上に体を横たえ、カーテンのあいだから月を眺めた。我々はいったい何処に行こうとしているのだろう、と僕は思った。でもそんなことを深く考えるには僕は疲れすぎていた。目を閉じると、眠りは暗い網のように音もなく頭上から舞い下りてきた。(P104)

「我々はいったい何処に行こうとしているのだろう」という疑問から、同様に不安を抱いている「僕」の気持ちを読み取れる。「我々」が、不安を感じた全ての人を指すかどうかは不明ではあるが、そこには本作に登場した「僕」、渡辺昇、そして妹が含まれているだろう。ただし、「そんなことを深く考える」には疲れすぎていたと感じた「僕」は、不安を抱いているものの、現段階では自分の状態を変える意思をまだ生みだしていない。

「僕」の状態がそのようなものだったから、妹の変化を述べた後、「僕」は「女の子がそういう徴候を見せはじめたら、男は一目散に逃げるかあるいは結婚するしかない」(P79)と付け加えた。「一目散に逃げる」と「結婚する」は一見、男女交際の対応策に過ぎないが、実は生活態度と深く関わっている。「確固としたいい加減な生き方」をする「僕」は、おそらく「一目散に逃げる」のほうを選び、その選択はまさに将来への不安に由来していると考えられる。将来への不安も「僕」がうまく妹と交流できないことの原因だと言えよう。そのような「僕」は妹を慰めたくないのではなく、どのように慰めれば良いか分からないのだ。一方、渡辺昇は「一目散に逃げる」のではなく「結婚する」ことを選んだ。これは、彼が世間の代表だったため、あるいは既存の秩序に従順であったための選択ではなく、「正直にぶつかりあう」、言い換えれば「ぶつかりあう生き方」を持っているから「結婚する」ことを選んだのだ。要するに、不安を抱いているというのは、「僕」と渡辺昇との共通点であるが、いかに対応するかは両者の相違点となる。「正直にぶつかりあう」、「ぶつかりあう生き方」で対応すること、これが渡辺昇の力強さで、村上春樹の言った「僕」という主人公が微妙に揺らぐ<sup>21</sup>根本的な原因と言って良い。勿論、揺らいだ「僕」は何かを変えようとする兆候を示していないが、渡辺昇との共通点および相違点こそ、「僕」の否定的な態度を変えた根本的な原因である。

「僕」と渡辺昇との対立は、生活態度における対立であるが、その対立が渡辺昇との接触によって次第に変化した。渡辺昇を家に招待するまで、「僕」は加藤典洋氏が指摘したように、彼のことを世間の代表と

---

<sup>21</sup> 注5に同じ。

見なし、妹との結婚も既存の秩序に対する従順さの表れと理解していた。つまり、この段階における渡辺昇は、独立した思考を持たない人間で、「面白みのないコンピューター・エンジニア（電気業界のからくりにおける批判力のない歯車）」<sup>22</sup>に過ぎなかった。だが二回目の対面を通して、渡辺昇が決して独立した思考を持たない人間ではなく、不安を抱く彼は「僕」と異なった対応を選び、「僕」と決定的に異なった生活態度を取っていることが判明する。そうして、「僕」の否定的な態度が肯定的に変わり、両者の対立も変化したのだ。

## 5 終わりに

前述したように、村上春樹は「ファミリー・アフェア」における渡辺昇を「異物」だと規定し、「異物を含んだ状況」の創作によって「いろいろなものを対立させ」<sup>23</sup>、小説の世界を広げようとした。本稿の分析から分かるように、この小説に登場した渡辺昇は明らかに「僕」と対立している。このような対立は、いかに小説の世界を広げさせたのだろうか。

周知のように、社会批判は村上春樹の文学的テーマの一つである。このテーマは、デビュー作の『風の歌を聴け』にすでに現れ、初期短編の「ニューヨーク炭鉱の悲劇」が初めて余すところなく表現した<sup>24</sup>。同時期の小説を考察すれば分かるように、村上春樹は常に社会と対立する「僕」を主人公として設定し、「僕」のパートナーが登場していても、その人物は「僕」とほとんど同様に社会と対立している。短編小説「象の消滅」で、「渡辺昇」という名を冠する人物が初めて登場したが、飼育係の渡辺昇は、単に「異物」の性質を持っているだけで、「僕」とは対立しない。したがって、村上春樹の言う「対立」という観点から見れば、「象の消滅」における飼育係の渡辺昇は、村上春樹の期待した効果を果たせなかったし、「象の消滅」における対立は依然として「僕」と社会の対立と言って良い<sup>25</sup>。

「ファミリー・アフェア」における渡辺昇は、完全に異なった存在である。異物としての彼は「僕」と対立し、その対立が「僕」を動揺させる。同じ不安を抱きながら、逃げださずに挑む渡辺昇を目の前にして、「僕」は揺れ動く。これは、それまでの村上春樹の小説にはなかった現象だ。勿論「僕」と渡辺昇の不安が何に由来するものなのかについては、さらなる検討が必要だと思われるが、社会に直面し、深くコミットした渡辺昇は、周りと一定の距離を保つ「僕」と決定的に異なっており、新鮮な感覚をもたらしたに違いない。要するに渡辺昇の登場によって、村上春樹はさまざまな角度から現実を反映させ、社会に対応する仕方も多様になったわけである。こうして、村上の小説世界は広げられた。

「ファミリー・アフェア」における渡辺昇を分析するだけでは、「渡辺昇」と呼ばれる人の性質を全面的に解明することはできない。いかなる人が「渡辺昇」と呼べるかについて、村上春樹の小説に登場したあ

---

<sup>22</sup> ジェイ・ルービン著、畔柳和代訳『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』（新潮社 2006・9）P169

<sup>23</sup> 注5に同じ。

<sup>24</sup> 拙稿「落盤に遭遇した「我々」—村上春樹「ニューヨーク炭鉱の悲劇」論」（『淡江日本論叢』2020・6）P1-24

<sup>25</sup> 拙稿「村上春樹文学における「逸脱」—「象の消滅」における渡辺昇を中心に—」（『村上春樹文学における「逸脱」』（淡江大学出版中心 2022・7）P185-206

らゆる渡辺昇を分析したうえで、はじめて分かるわけだが、少なくとも本稿の分析を通じて、以下のような結論にたどり着くことができる。「ファミリー・アフェア」における渡辺昇は決して無批判な世間の代表者ではなく、社会と対立する「僕」と同様な存在と言って良い。ただ、彼は堂々と現実とぶつかり、「僕」と異なった対応の仕方をとった。これこそ、彼が「異物」と規定された所以である。

## テキスト

村上春樹『村上春樹全作品 1979～1989⑧ 短編集Ⅲ』（講談社 1991・7）

## 参考文献

村上春樹「村上春樹大インタビュー「ノルウェイの森」の秘密」（『文藝春秋』 1989・4）

村上春樹、柴田元幸「山羊さん郵便みたいに迷路化した世界の中で」（『ユリイカ 臨時増刊』 1989・8）

加藤典洋『村上春樹の短編を英語で読む 1979～2011』（講談社 2011・8）

酒井英行『村上春樹分身との戯れ』（翰林書房 2001・4）

ジェイ・ルービン著、畔柳和代訳『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』（新潮社 2006・9）

関氷氷、楊炳菁「落盤に遭遇した「我々」－村上春樹「ニューヨーク炭鉱の悲劇」論」（『淡江日本論叢』 2020・6）

楊炳菁「村上春樹文学における「逸脱」－「象の消滅」における渡辺昇を中心に－」（『村上春樹文学における「逸脱」』（淡江大学出版中心 2022・7）

【関氷氷（日本近現代文学）、楊炳菁（日本近現代文学）】